

宇都宮の伝統文化

二荒山神社の祭礼



二荒山神社
の神楽



菊水祭



堀米の
田楽舞



堀米の田楽舞

宇都宮市指定無形文化財

田楽舞は五穀豊穡を祈念する舞です。二荒山神社で現在の田楽舞が行われるようになったのは、江戸時代文化年間の頃と言われています。夏の初め、五穀豊穡を祈念する祭が行われるようになり、田楽舞が取り入れられ、田舞祭を行うようになったものと思われています。この田舞祭は、現在では5月15日に行われています。また、12月15日と1月15日のオタリヤでも奉納されます。



田舞祭の様子

田舞祭では社殿前、オタリヤでは下之宮で舞います



詩の歌詞

1番
国も栄えて 民も豊かに 治まる御代の ためしには
2番
池のみぎはに 鶴と亀 よろず代(よ)までも 限りなき
3番
千代も経なまし 姫小松 君の恵みぞ ありがたや

田楽舞では、拝殿の前の中央に、約1.5mの竹の棒に横木を十字に通した踏掛(ふんがけ)を置き、右手にささらを持つ2人、左手に銅拍子と鞆鼓(かっこ)を持つ2人が向かい合い、中央に踊り手のささらと柄太鼓が並びます。歌にあわせ、腰をかかめる田植えの様子や、土手に見立てた竹の踏掛に足をかけて休めるしぐさをユーモラスな踊りで表現します。

堀米の田楽舞の衣装と小道具



田楽舞で使用される衣装や小道具は、二荒山神社で所有しており、管理されています。その衣装は独特のもので、白足袋、白衣の上に紐で膝と足首をくくりつける裁着袴(たっつけばかま)、上には裾の後ろが前より10センチほど短い半尻(はんじり)の羽織を身に付けます。さらに、周りに赤布を垂らした丸笠をかぶります。小道具は、鞆鼓、銅拍子、柄太鼓、ささらの4種類です。本来は笛が入ります。現在の田楽舞はササラ舞いのみで2分あまりの短い踊りです。

〈堀米の田楽舞の歴史〉

田楽舞は、豊作を祈る農耕儀礼として平安時代に始まり、鎌倉・室町時代には見せるための芸能に変わり、神社の祭礼行事などに組み込まれて全国で伝承されています。堀米の田楽舞の由来は天喜5年(1057年)源頼義・義家が奥州の安部氏追討の途中、二荒山神社に戦勝を祈願し、乱を平定し凱旋のおり、田楽舞を奉納して祈願成就にむくいたのが始まりと言われています。源頼朝が二荒山神社の神領として7500石を寄進し、その内18石を田楽舞奉納者が賜ったといえます。また、現在の田楽舞は、文化年間の頃、旅芸人が日光で演じたものを模倣し、それを二荒山神社の御神領であった宇都宮市関堀町の堀米地区の農家6軒に伝授されたもので、この6軒により代々継承されたものだとも言われています。

〈オタリヤ〉

オタリヤでは、お炊き上げのほかに、田楽舞の奉納と、神輿の渡御が行われます。祭神の乗る神輿が社殿から出て一行は階段を下り、下之宮へと向かいます。下之宮では渡御の式典として、神官の修祓、祝詞奏上が行われ、いよいよ田楽舞が奉納されます。5時半頃、列を整えて神輿が町の中を練り歩く渡御が始まります。





■ 二荒山神社の神楽

開催日：1・5・9月の各28日

場 所：二荒山神社

■ 菊水祭

開催日：10月最終土曜日・日曜日

場 所：二荒山神社

■ 堀米の田楽舞

開催日：12月15日・1月15日〈オタリヤ〉

5月15日〈田舞祭〉

場 所：二荒山神社

平成24年度 宇都宮市伝統文化映像記録作成事業

企画・制作：宇都宮市伝統文化映像記録作成実行委員会

協力：宇都宮二荒山神社 堀米の田楽舞保存会

宇都宮二荒山神社の神楽保存会

助成：平成24年度文化庁文化遺産を活かした

観光振興・地域活性化事業

発行日：平成25年3月31日

著作：宇都宮市教育委員会

連絡先：宇都宮市教育委員会文化課

宇都宮市旭1丁目1番5号

TEL. 028-632-2764

FAX. 028-632-2765

